



生活様式を変えよう

桑野 巍

何の予告もなしに東日本で大地震と津波が発生した。防ぎようのない天災だった。続いて人災ともいえる原発事故が起こり、危険な情報はすべて不安な情報に変わった。東北地方の人たちや一部関東地方の人たちの生活を思うと酷過ぎる大災害で、映像を見るにつけ涙が止まらない。映像の99.99%は無残そのもの、残り0.01%は子供の笑顔や即応自衛官と地方公務員、医師などの活躍でわずかな救いだった。

関西地方からも復興の手助けに向かったと聞いたが、私なぞ少量の義援金を箱に入れる程度で、自分の無力さを痛感しただけ。ただ「自分たちの生活はこれでよいのか」は自問自答した。答は「生活様式を変えるべし」で便利社会との決別に挑戦してみようと思った。同じことを首都圏に住んでいる人たちにも呼びかけたくなった。とくに安全神話が続いていた原発が事故を起こし、恩恵が嫌悪に変わったのだからより大きな反省が必要と思った。

首都圏に住んでいる友人に「君たちは便利社会を追究していた。東北地方で生産した電力を利用してきた。いまさらたいまつや行燈の生活に戻れないだろう」と嫌みたっぷりに言うと、彼は「関西だって福井から貰っているのではないか」と反論してきた。ついでに東京への一極集中現象を攻撃、飛行機、新幹線、高速道路そして人、モノ、カネ、情報など交通と人間を磁石のように吸いあげていなかったか、これは東京の思い上がり。もう一つは超高層ビルだ。15年前70棟だったが現在370棟が林立し、地下道の建設、テレビ塔の建設など自我を欲しいままにしているとたてついた。

彼は黙り込んでしまった。彼はスポーツ観戦が趣味なので「大相撲も問題ありで楽しみが少なくなろう」と持ちかけたら「八百長騒ぎもあって……。でも電力消費とは関係ないよ」と言い切った。プロ野球のドーム型球場は大量の電気を消費するから今年は「すべて中止」でどうかと別次元の提案したら

「ファンの期待を裏切る発言」と反発し、プロスポーツ界の一面を露わにした。

それにしても東北地方の人たちの苦しみと我慢強さ、前向き行動には頭が下がる。復興の目途が立たないだけでなく、海、陸（土地）、空の恐怖にさらされながら時に笑顔を見せてくれるのだから「日本人強し」を感じる。その点では必ず復興を信じているが、半面政治の貧困、財政の貧困、環境汚染は腹立たしい。もう一つは「人の不幸は蜜の味」的なTV報道で、報道の名を借りての取材、電力の大量消費はこのままでよいのか、民放局の多数存在と浪費が気に懸かった。

原発事故は未知の体験だったろうが、日本のエネルギー政策は大転換の必要も痛感した。素人考えの域を出ないが、今考えるとIT技術より先に少々コストが高くても自然エネルギーの開発普及に取り組みべきだった。その意味では政策を根本から見直す勇気を持たなくてはならない。日本人の英知を結集して「便利とリスク」を考えてほしいと思った。

日本復興の道、東北地方復興、故郷を捨てることのないような地域のつながりを再構築してほしい。こうした復興や再構築は長い道のりだろうが、自分たちの帰るまちがないようでは困るわけで、全国民の協力が必要なことはいうまでもない。天災の跡始末、住宅やライフラインの新建設、人災といえる原発事故との戦いは一朝一夕には終わらない。とくに農林漁業の復興は20年30年の長期間が必要だろうが、東北人のねばりを期待したい。

われわれ西日本人も生活様式をがらりと変えてでも応援の旗を振りたい。単なる便利性だけを選ぶのではなく多少不便でもそこは我慢して、そして多少経済が減速しても安全安心の道を探りつつ、復興再建のパワーを発揮してもらいたい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）